

【症例】63歳女性。1994年発熱，血尿を主訴に当院腎センターを受診した。血小板数7,000/ $\mu$ l，LDH 420 mU/mlであり，末梢血に破碎赤血球を認めたため，血栓性血小板減少性紫斑病の診断にて入院となった。その後，血液内科へ転科となり，血漿交換とプレドニン，ビンクリスチン，ガンマグロブリン大量投与を行い寛解に到達した。退院後，プレドニン20～30mg/日を継続していたが，95年1月，3月，4月に再発を繰り返した。その度にプレドニンの増量とガンマグロブリン大量投与にて軽快していた。12月11日出血傾向，意識障害が出現した。血小板12,000/ $\mu$ l，LDH 3,988mU/mlであり，4回目の再発と診断し，入院となった。プレドニンを60mg/日に増量するとともに，連日の血漿交換とビンクリスチン2mg/週の投与により再寛解となった。

【考察】血栓性血小板減少性紫斑病に対して，ガンマグロブリンは血小板凝集因子を中和することによって効果を発揮すると考えられている。本例は，再発の度にガンマグロブリン大量療法によって寛解となった症例であり，その有用性を示唆するものと考えられる。

#### 4. 当科外来における心房細動症例の臨床的検討 —血栓塞栓症を中心に—

(東女医大 心臓血圧研究所内科)

薄井秀美・岩出和徳・佐藤加代子・

山内貴雄・吉岡佐知子・川城直美・

上塚芳郎・笠貫 宏・細田蹇一・

(国立横浜病院臨床研究部) 青崎正彦

1995年4月から2カ月間，心臓血圧研究所内科に通

院した患者4,838人のうち，心房細動 (af) を認めた患者について臨床的に検討した。

対象はaf症例933例で，発作性af 625例(67%)，慢性af 308例(33%)であった。平均年齢は62.1歳であった。

基礎心疾患の内訳は弁膜症(VAF)415例，非弁膜症(NVAF)518例であった。VAFのうち280例は人工弁置換術例であった。NVAFの基礎心疾患の内訳は虚血性心疾患86例(17%)，心筋症49例(9%)，先天性心疾患33例(6.4%)，不整脈疾患98例(19%)，その他14例(3%)，基礎心疾患を合併しないaf 219例(46%)であった。血栓塞栓症の既往のある症例はaf 933例中VAF 98例(VAFの23%)，NVAF74例(NVAFの14%)であった。NVAFにおいて血栓塞栓症の既往症例の基礎心疾患としては虚血性心疾患16例(19%)，心筋症17例(35%)，不整脈疾患10例(10%)，lone af 30例(13%)を認めた。NVAFにおける抗血栓療法としてはアスピリン92例，チクロピジン 112例，ワーファリン97例が投与されているが，いずれも血栓塞栓症発症後に投与開始となった例が多かった。また，NVAFの合併症(高血圧，糖尿病，高脂血症)と血栓塞栓の既往について検討したが，両群間に有意差は認めなかった。心エコー検査では，NVAFにおいて血栓塞栓症の既往のある症例では有意に左房径が大きい傾向がみられた。さらにaf 933例について1995年3月から11カ月のfollow upで血栓塞栓症を発症した症例は17例であった。このうちNVAFは10例で，基礎心疾患を有さない例は5例であった。VAFでは弁置換術後が4例，僧帽弁狭窄症を伴う例に3例認められた。

### 第18回東京女子医科大学血栓止血研究会

日時 平成8年9月13日(金) 5:30～8:00 pm

場所 第一臨床講堂

学術映画「生命を運ぶ臓器血管」

当番世話人挨拶

一般演題

(第一製薬株式会社)

(血液内科) 溝口秀昭

座長(血液内科) 寺村正尚

#### 1. 不安定狭心症における von Willebrand 因子および凝固線溶系の変化

(国立横浜病院循環器科) 太田吉実・青崎正彦

(東京女子医大心研内科) 山内貴雄・岩出和徳・大木勝義

#### 2. 虚血性脳血管障害患者における活性化血小板の測定

(神経内科) 山崎昌子・内山真一郎・橋口孝子・岩田 誠